

ほ っ け じ 大屋町加保の法華寺で津藩の関係資料を発見

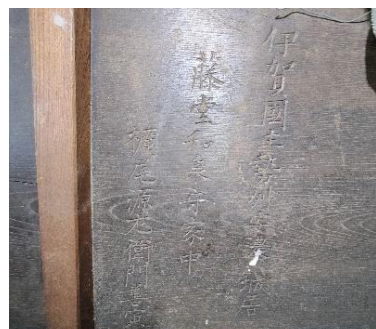
とうどういずみのかみ 津藩の藩主である「藤堂和泉守」の文字を刻む

養父市大屋町加保にある法華寺の山門の正面に「加保山」と書いた山号額が掲げられています。

法華寺が 2026 年 4 月に山号額を修理するため山門から外したところ、裏面に^{い が こくしゅせいしゅう}伊賀國主勢州^{あ の じょう}安濃城居^{とうどういずみのかみかちゅう}藤堂和泉守家中^{とち お げんざえもんよしとら}櫛尾源左衛門善寅」という文字を発見し、市の調査による結果、藤堂高虎に関する資料の一つと判明しました。



△法華寺の山門



△山号額の表面（左）と裏面（一部）

法華寺の山門の正面上部に「加保山」と書いた山号額（縦 54 cm、横 114 cm）は、2026 年 4 月に表面を彩色によって修理しましたが、裏面は当初の状態です。

「伊賀國主勢州^{い が こくしゅせいしゅう}安濃城居^{あ の じょう} 藤堂和泉守家中^{とうどういずみのかみかちゅう} 櫛尾源左衛門善寅^{とち お げんざえもんよしとら}」という文章は、「正徳 6 年（1716）閏 2 月、伊賀国主である伊勢国の安濃津城（津城の別名）の藤堂和泉守の藩士である枋尾善寅が寄進した」と解釈しています。

この藤堂和泉守とは、初代藩主の藤堂高虎ではなく、第 5 代藩主の藤堂高敏^{たかとし}を指しています。高虎は津藩 32 万 3000 石の藩祖にあたります。

法華寺は枋尾家の菩提寺であることから、枋尾善寅が枋尾祐善などの先祖供養のために山号額を寄進したものです。

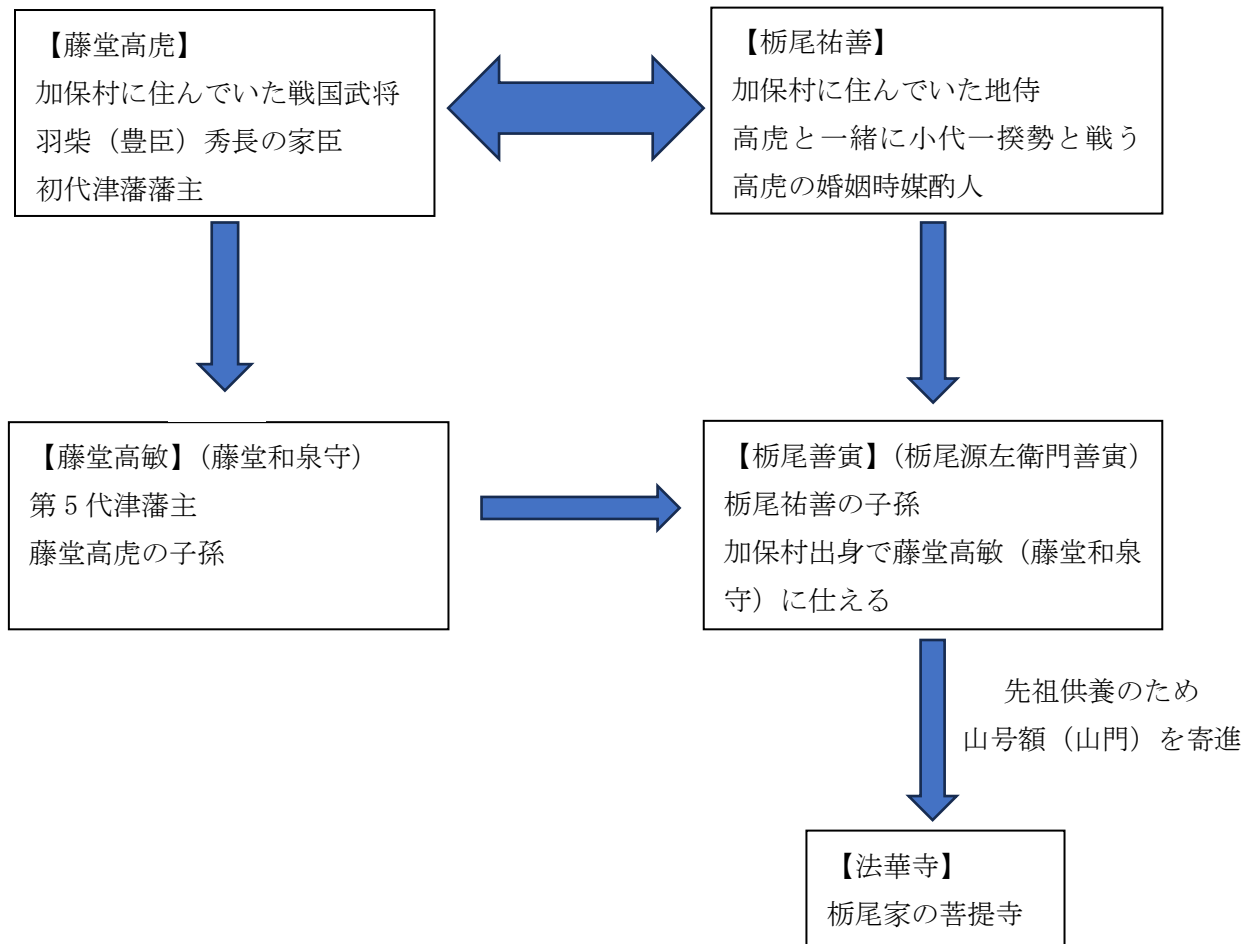
山門（薬医門、切妻造屋根）の正確な建築年代は、棟札がないため不明ですが、木材に刻まれた絵様（えよう）という渦巻状の彫刻から判断すると、18 世紀前半頃の特徴があります。こうした年代的な整合性を考えると、「奉寄進」とは山号額だけでなく山門を合わせた寄進であると推定しています。

【補足事項】

藤堂高虎は、天正 9 年（1581）、羽柴秀長から但馬国養父郡において 3000 石の領地を与えられ、養父郡大屋庄（現在の養父市大屋町付近）を治めました。高虎は、加保の地侍である枋尾祐善（初代）の屋敷に別館をたてて屋敷とし、ここで一色義直^{いっしきよしなお}（香美町香住区中野）の娘である久芳院^{く ほういん}と結婚したと伝わります。

枋尾祐善の子孫である枋尾善寅（枋尾家第 5 代、加保村の農民、地侍）は、先祖の由緒書を持参して津藩に仕官を願い出ました。元禄 2 年（1689）11 月 1 日、合力米 40 俵 4 人扶持、大小姓役で仕官しました。この時の藩主は藤堂高虎の孫にあたる第 4 代藩主の藤堂高睦^{たかちか}です。枋尾善寅は、藤堂高虎が大屋庄を治めたときに、高虎を支えた恩人の子孫として津藩に採用されています。

(相関図)



寺院名 法華寺（日蓮宗）
住 所 養父市大屋町加保 466 番地
住 職 松村貫昌^{まつむらかんしょう} 氏

【問合せ】

教育部 歴史文化財課 課長：向 秀樹 担当者：谷本 進(文化財専門員)
電話：079-661-9042